まちの話題

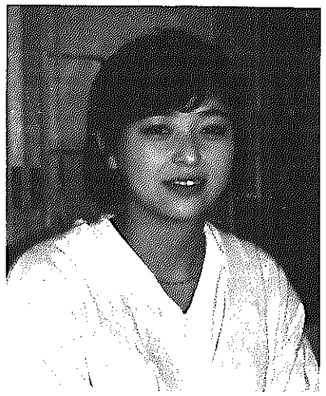
表彰おめでとうございます

古川さんが統計功労で総務庁長官から

昭和六十年の国勢調査の優秀調査員として古川庄三郎さん（鷲ノ木桜町・七十七歳）が、総務庁長官から表彰されました。

古川さんは、昭和四十五年から各種統計調査の調査員として勤められています。

20代目ミス雪椿に本間さん



お隣の加茂市で毎年開かれ、県内でも有数の観光行事になっている「雪椿まつり」。

この開幕を飾るミス雪椿公開審査会が四月十三日、加茂文化会館で行われ、ミスには本市から出場した本間敦子さん（真木新田・会社員・十九歳）が選ばれました。

ミス雪椿は、祭り期間中の五月五日まで、市中パレードや雪椿大園遊会などの行事に参加したり、新潟駅など各地へ出向いて、ユキツバキの苗木を配ってPRをしたりと、祭りのヒロインとして活躍します。

二十周年を迎えた今回は、県内三十三市町村から百三人が応募。一次審査で十人に絞られ、公開審査では加茂市民約八百人などの投票で、ミスと準ミス二人が決められました。

「全く予期していなかったのでびっくり。まだ自分のことじゃないみたいです」と話す本間さんは、高校時代にやっていたテニスとドライブが趣味という社会人二年目のお嬢さんです。

前年度の反省と今後の取り組みを確認

―市農業振興大会―

三月三十一日、産業厚生会館で白根市農業振興大会が開かれ、会場には農業生産者や関係者ら約二百五十人が集まりました。

大会では、各種共進会や市ほう賞規則に基づく表彰、事例発表、記念講演が行われ、また、農業振興についての前年度の反省と今後の方向を確認し合いました。

表彰された人や団体は、次のとおりです。（最優秀賞のみ）

【うまい米生産出荷共進会】▽**多収穫部門**〈個人〉平山信之（下道潟）〈団体〉中塩俵農家組合▽**良質米生産出荷部門**〈団体〉優秀賞＝下吉上、沖新保、東笠巻新田二、古川、下赤渋、根岸、十五間、戸頭上、下茨の各農家組合

【麦・大豆生産出荷共進会】▽**麦生産出荷部門**〈個人〉上杉美春（北田中）〈団体〉東萱場生産組合▽**大豆生産出荷部門**〈個人〉樋口一善（中央通三）〈団体〉鰺潟転作組合▽**麦・大豆輪作部門**〈個人〉金内与夫（上八枚）〈団体〉上八枚農家組合

【野菜立毛品評会】▽**ハウストマトの部**横山与志雄（西笠巻新田一）▽**ハウスキュウリの部**本間正満（上笠巻）▽**露地トマトの部**田辺栄作（上笠巻）▽**露地キュウリの部**外川徳雄（下笠巻）▽**食用菊の部**長谷川稔（堀掛）

【果樹立毛品評会】▽**ももの部**清水チーム（武石清隆、山田竜一、美濃川昭）▽**露地ぶどう（巨峰）の部**古町チーム（池田良一、藤井嘉幸、星増男）▽**日本梨（二十世紀）の部**下赤渋チーム（青木洋一、渡辺英男、五幣正樹）▽**日本梨（幸水）の部**長谷川伸（中大郷）

【球根品評会】▽**チューリップの部**田中佐一（中塩俵）▽**アイリスの部**内藤作一（中塩俵）

市ほう賞規則に基づき

高井興野農家組合を表彰

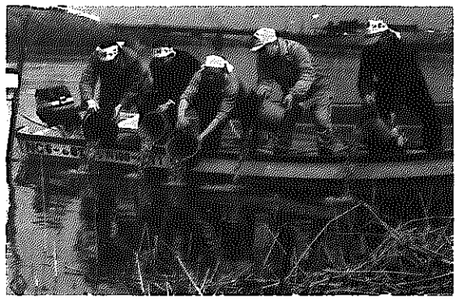
高井興野農家組合は、昭和六十年度全国麦作共励会で、品質改善や収量向上など経営改善の面で努力の跡が見られ、地域や全国の麦作農家、集団の模範となることから、最も優秀な集団として「農林水産大臣賞」を受けました。

市では、その功績に対し、白根市ほう賞規則に基づき、同農家組合を表彰しました。

※白根市ほう賞規則に基づく表彰…市政の進展や産業の振興、文化の向上などに功績のあった人や団体を、市長が表彰するものです。

サケの稚魚を放流

信濃川漁協白根支部では三月二十九日、中ノ口川凧見橋付近から、体長五～六㌢のサケの稚魚約六十万匹を放流しました。「年々サケの捕れる量も増えている」と同支部では話しています。



消費の多様化で行政指導が難しくなった……。これからは皆さんが考えていく時代です。

（NHK解説委員 加倉井　弘氏）

青年農業会議主催「農政講演会」から

設立一周年を迎えた市青年農業会議（大旗一男会長・会員八十四人）では、三月二十九日、サルナート吉運堂で、定例総会と農政講演会を開きました。「二十一世紀農業の展望」と題されたNHK解説委員の加倉井　弘さんの講演には、会員や一般農家の人など約七十人が詰めかけ、会場には質問や意見が活発に飛び交っていました。二時間の講演内容を要約して紹介します。

相手に認められるものを作る

物が足りなかった昔と違い、今の過剰時代では、いいものを作らなければなりません。自動車だって、昔はちゃんと走ればそれでよかった。今は気に入ったものを選びます。高い米でも、おいしければいいという時代です。

逆に「北海道の米はまずいが安い」というので、外食産業が欲しがります。おいしい米でも安い米でも、相手に認められることが大事です。つまり、量よりも質が求められているが、質の中にもいろんなものがあるということです。

しかしながら、まだ「作っていればいいんだ」「米であればいい」という考えが、頭の中に染みついているようです。

ブランドで売る時代

コシヒカリは供給不足なので、みんなが作れればいいわけです。農協も売りやすくなります。しかし、農家にとっては経営上うまくないため、どうしても機械化に都合のよい米を作ろうとします。

また、コシヒカリといっても、作る場所で全く味が違っています。コシヒカリをたくさん作るには、まず売れるものでなければなりません。「白根のコシヒカリはこういう味だ」と特徴を打ち出し、ブランドで売る時代です。

このようなことは、全国的に行われだしていますが、今までなぜ考えなかったのか。今までは政府に売ればよかった。何も考えなくても後で買ってくれました。

自主性に任される農業

しかし、政府の考え方も変わってきています。消費パターンが多様化し、行政が画一的に指導できなくなってきました。「行政が何もやってくれない」のではなく、指導できなくなったのです。

国は補助金をメニュー方式にし、使い方は県で決めなさい、と言ってきています。実際、種づくり用として、また安い米、おいしい米、もち米など、地域的に専門化している県もあります。

まあ、世の中がいっぺんに変わることはないと思いますが、少しづつ農業が自主性に任されてきているということです。

農家が自ら考えていく時代

農家が、それぞれ違うねらいを持ち始めると、技術が専門化し、指導も難しくなります。そうなると、皆さんが自分で勉強するしかないわけです。また、手間をかけないで作るのは、兼業農家にとって大事なことです。しかし将来は、そうはいかなくなります。

市場に受けるブランドづくり

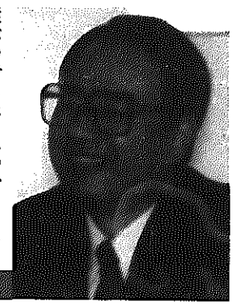
行政は、みんながいいと思うものを奨励します。しかし、そのときはすでに遅いということです。全国でコシヒカリを作っても競争になりませんし、個人の力では無理があります。県や市、集落単位で名案を考え出し、行動していくのがよいでしょう。

有機米はおいしいが、そのおいしさを認めてくれるかどうか。認めてもらえれば高く売れます。そのような人はどうやって米などを選ぶのでしょうか。ブランドで決めるわけです。つまり、どういうブランドをつくるかがカギとなってきます。

市場へ行って、自分の作ったものがどう扱われているか実態を知る必要があります。そして市場の信頼を得る。これは値段に反映されます。PRも必要です。これには、まずブランドがしっかりしていないとだめです。絵柄や名前の付け方にも、うんと知恵を絞るべきです。

農村と都会が共存する時代

昔は、農村の人は都会の人を嫌っていました。しかし、今はそういう時代じゃありません。昔は利用されるというイメージがありましたが、今は農機具メーカーや肥料屋よりも立場が上です。これからは都会をうまく利用しながら、いっしょに仲よくやっていく時代です。そして将来は、農村の人も都会の人も区別がつかない時代になると思います。



東大農学部を卒業後、昭和35年にNHKに入局。「明るい農村」などを手がける。川崎市在住